

# 学習障害

## (3) 学習障害 (LD) のある子供の困難さへの対応

### ① 学習面での困難への対応

LDのある子供には、学力全般にわたる遅れはありません。しかし、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する又は推論する」などの学習の特定の領域につまづきが見られます。例えば、会話は学年相当以上にできても、読みはできないといった不均一な特徴です。

LDは、中枢神経系(脳と脊髄)の機能障害が背後にあると推定されています。それによって、認知(情報処理)過程、つまり、情報を「受け止め、整理し、関係付け、表出する過程」のどこかに十分機能しないところをもち、その結果、学習面での深刻なつまづきが生じると考えられています。

例えば、聴覚的な刺激を処理する能力、聴覚的弁別や聴覚認知につまづきが見られる場合、聞いて理解したり、覚えたりすること、さらには、読みなどにおいても困難さを呈します。読みは、文字という視覚的な情報を頭の中で音に変換する作業が必要なため、こうした認知能力とも深くかかわっています。特に欧米で見られるディスレクシア(読み書き障害)の主な原因は、聴覚的な刺激を処理する能力につまづきが見られるということで見解は一致しています。

同様に、視覚的な刺激を処理する力につまづきが見られる場合にも、読み・書きといった視覚性言語をはじめとする学習全般に影響を与えます。

その他にも、記憶する能力(学習したことを蓄積する力、学習の過程で処理する際に必要となる一時的、作動的な記憶等)や、注意の問題(学習することに対して注意を向ける力とその注意を持続させる力)、さらには、モチベーション(学習に取り組もうとする主体的な気持ち)も学習には大きく関連しています。こうした能力が十分に機能しないと学習面での困難さをもたらします。

学習面での困難さに影響するのは、上記のような子供の内的要因だけでなく、外的な要因も大きく関与します。指導内容や方法、教材などが、その児童生徒に対して適切でない場合にも、学習面での困難さを生じさせます。LD等のある児童生徒は、認知特性のプロファイルにアンバランス(強い部分と弱い部分との間の差)が有意に見られるため、こうした指導方法や教材といった外的な刺激の性質によって、その理解度が左右されることも少なくありません。

このように、学習に著しい困難さが見られた場合には、本人の認知特性に代表される内在する要因と、課題や指導法、教材の特徴といった外的要因との両方が影響することが多

いと考えられます。

それゆえ、LDのある児童生徒に対してどのような指導が有効であるかを検討するためには、このようなつまずきの背景にある認知過程を把握し、個々に応じた学習の仕方を探っていくことが重要です。

## ② 二次的障害

LDのある子供は、知的発達に遅れが認められず、できることも多いために、認知や行動上の特性が障害として気付かれなかったり、認められなかったりするケースが多く見られます。そのため、必要な支援が受けられないばかりでなく、「やる気がない」「努力が足りない」などと非難や叱責を受けるなど、全般に厳しい見方をされてしまいがちです。その結果、自信や意欲を失ったり、自己評価が低くなったりして、本来ならできることも困難になってしまうなどの二次的障害が生じてきます。

一次的障害であるLDという特性に応じた支援を工夫するとともに、自信や意欲をもたせ、自己評価を高めていけるような対応に心がけるなど、二次的障害の予防と改善を常に意識して対応することが大切です。